

痴漢電車・カントボーイ

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 輪姦・レイプ
- クリ攻め・二穴攻め
- 潮吹き・イラマチオ
- 玩具・ポルチオ攻め
- 快樂墮ち

がたんごとん。

「……？」

がたんごとん。さわ、さわ……。

「っん……ん？」

すり、すり……むにっ♡

「ッ……！」

現在時刻は朝。通勤ラッシュの満員電車の中で、学生である静流（しずる）は現在進行形で尻を揉まれていた。

（くそっ……遅刻しかけていつもと違う電車に乗ったらこれだよ……！）

心の中で毒づく。電車に乗って少ししたらこれだ。自分は男で、尻だって女性の物と違って硬いはず。

静流はウルフカットの黒髪で、背だって日本人の平均よりいくらか高く、決して女には見えないだろう。だというのは、今静流の背後に陣取っている男は静流の尻を揉み続けている。

しかも、手つきが妙にいやらしい。尻についている薄い肉の感触を味わうかのようにゆったり揉んだり、急に強く抓ってきたり、緩急をつけてくるのだ。

慣れている。絶対に魔が差してなんてものじゃない。静流はそう確信した。

（次の駅で降りて、警察に突き出してやる……！）

別に大人しい性格でもない静流は、どうしようもない悪趣味ないたずらを心底侮蔑し、この男をとっ捕まえてやると意気込んだ。

……の、だが。

「っんひ！？」

今度はわき腹に触れてくる手が現れた。思わずそちらを向くと、尻を揉んでいる男とは別の男が、静流のわき腹に触れるか触れないかギリギリのラインを攻めるフェザータッチのふれあいを仕掛けてきていた。

どういうことだ？痴漢が、二人？訳が分からない。ドン引きしつつまじまじ見つめてしまう静流に、男二人がニヤリと笑った。いや、それだけではない。静流の周りにいる数人のサラリーマンたちが、みんなニタニタと怖気が走るようなやらしい笑みを浮かべていた。

——静流は知らなかったのだ。この路線のこの時間の○
○駅行きの電車の三車両目が、痴漢御用達であることを。

「っうあ、ん、ん、なに、してっ!？」

静流の前に立っていた男がくるりところらを振り返り、唐突に静流の胸に手を伸ばし、堂々と揉んでくる。

それを皮切りに他の人間も寄ってたかって今日のターゲットである静流に嬉々として触れ始めた。

「っぁ、ふざけんな、あんたらなにやってんだよ……！俺は男だ、いや、女の人にだって駄目だけど……ッ！正気かよ！」

「何言ってるの？ここに来たってことは痴漢されにきたんでしょ？」

「そうだぞ。いやあ、健康的な若い肉体、素晴らしいね。ああ、いきり勃ってきたよ、ふふふ」

「おじさんたちに輪姦されにくるなんて、見かけによらずえっちなんだね……♡」

ドン引きして吐き捨てる静流に対し、男たちはますます興奮した様子でにんまりと笑う。

男たちは二十代から五十代くらいまでさまざまな年齢層がおり、品定めでもするかのようにじっとりと濡れた視線を送る。

もちろん視線だけではない。ベルトのバックルを外し、着ているシャツのボタンを外したり、それぞれが役割分担して、統率された動きをしていた。

囲んで回りの人間から見えないようにガードしつつ、そのままレイプする下地を整える程度には、彼らは手慣れた常習犯だった。

はじめは突き出してやると意気込んでいた静流も、これには恐怖を感じ、身体をがちがちに強張らせながら助けを求めなければと口を開く。

「た、助けて……！」

しかし、出てきたのはか細い蚊の鳴くような声で、到底囲いの外の人間には届かなかった。

「っひ……」

どうしよう。こいつらには言葉が通じない。同じ人間とは思えなかった。

触れてくる手は全く遠慮もなにもなく、乳首やちんこ、わき腹、尻.....ありとあらゆるところを撫でまわしてくる。静流の持っていた鞆はもぎ取られ、邪魔だと言わんばかりに床に投げ捨てられた。

当然股間にも容赦なく手が伸びて、一人の若い男が静流の股間を揉もうとする。その瞬間、青ざめていた静流は慌てたように口を開く。

「や、やめろ.....っ！」

男の手を掴んで止めようとするが簡単に振り払われ、そのままむんずと股間を掴まれた。当然そこには男の象徴であるちんこがある。.....はずが、静流にはそんなものは存在しなかった。

「ん？あれ、こいつちんこがない？」

「えっ、もしかしてカントボーイ？レアものじゃん」

男が首を傾げると、痴漢の中では年齢層の高い男が嬉々として声をあげる。

そうだ。静流は普通の男ではなく、ついているはずのちんこの代わりに女性器—まんこがついている、突然変異、カントボーイなのだ。この秘密は当然親しか知らない。

まあ、もうすでに過去形なのだけど。

「いいじゃん。じゃあまんこに今日は突っ込めるのか！」

「ケツも使うだろ、穴が足りないし」

「ぎゃはは、違いない！」

他の男たちも喜び、場の空気が盛り上がる。興奮とともに周囲にむわりと雄臭い匂いが広がり、男たちはそれぞれ己の自慢のいちもつを取り出した。

赤黒い使い込まれたちんぽを四方八方から擦りつけられる。熱い肉の塊に、静流は目じりに涙をためた。

しかし、そんな姿は男たちの劣情を煽るだけで、一人の男が手早く静流のベルトのバックルを外し、抜いて床に捨てて

しまった。そのままズボンも下着ごとひざ下までズリおろされてしまい、静流はもはや押しのけて逃げるという選択肢すら奪われてしまった。

いや、もうすでに恐怖で支配されていて、逃げることもなんてできなかっただろうけれども。

「そんな怖がるなよ兄ちゃん♡おじさんたちがたあっぷり気持ちよくシてあげるからさ♡」

「や、やだ……ん、あっ……やめ、っう、っひぐ、っあゝ……さわ、るなあ……脱がすな、っう、うっ」

ズリ下げられたズボンを戻そうとするが、男たちの手や膝が意地悪くそれを邪魔してくる。

おかげで下半身丸出し、上もシャツのボタンを外され、薄い胸板から腹筋を男たちの眼前に晒す羽目になってしまった。

こんな、電車の中で露出してしまうなんて。下唇を噛んで震える静流のまんこを、さすっ♡さすっ♡と男の手がお伺いでも立てるかのように撫でてきた。

「処女まんこっばいな。いいね〜♡かわいいよ♡名前は？」

「い、いうわけ、ない、だろっ……っふ、うあ……ッ、こす、るなあっ」

突っぱねつつも、抵抗はできない。気持ち悪い。嫌悪感でいっぱいだ。

……そのはずなのだが、好き勝手に触れられているうちにだんだんとそれだけではなくなってきた。

「はっ……っは、んうゝ……っく」

「どうしたの？濡れてきたよ？もしかして気持ちいい？感じる？」

ぴっちりと閉じられた割れ目がしっとりと濡れ始めていた。目立たない小さなクリを指の腹で押しつぶし、執拗に撫でまわされれば誰だって雌なら感じてしまう。

「ちがっ……♡うぎ、っうゝ、やめ……つぶ、ふううっ
……♡」

すりすりっ♡くにっ♡

性感帯を集中的に攻められ、静流の口から漏れる声にどんどん甘さが滲んでくる。当然静流自身はそんなの望んではない。

逃げたくて逃げたくてたまらない。でも、囲まれてしまっている以上無力なのだ。

（なんでだよおっ！クリ、こんなにきもちい、なんてえっ
……！しらな、自分で触ってるときと全然、違う、悔しいっ
……くそ、くそくそくそっ、こんなやつらに、好き勝手触られてえ……ッ！）

くり、くり、こしゅっ♡さす、さす、ぐにっ♡♡♡

クリとまんこがじゅくじゅく疼く。

「あゝッ♡♡♡」

それに乗じて乳首を抓られ、気持ちよくなってるはずなのに口から大きな聞くに堪えない喘ぎ声が飛び出して、静流は慌てて己の手をぱっと上げて口を塞いだ。

しかし、塞いだからといってなにも解決するわけがない。

「あ〜っ、もう限界、じゅぱっ♡じゅるるっ♡」

男の一人が腰をかがめ、静流の豆粒のように小さく慎ましやかな乳首にむしゃぶりつく。

ねっとりと舌全体で乳首を舐られながらまんこを撫でられると、腰が勝手にびくびく跳ねてしまう。

これが快感だと気づく……否、気づいてしまうのに、そう時間はかからなかった。

「っひ、い！？や、やめ、っあ♡おれ、おんな、じゃあっ……ん、ンうゝッ……」

「そろそろたっぷり濡れてきたし、まんこに指入れちゃお〜っと♡」

「あっ……や、やだ、指やだ、たすけ、誰か助けて……
っ！」

「ばーか、誰も助けに来ねえよ。ここの車両の奴らはみーんなグル、見ただけのやつが多いけどな」

静流の嗜虐心を煽る仕草に、男たちはよりいっそう笑みを深くする。

まんこに触れていた男は、ねちよりと糸を引くようになったのを見計らい、人差し指を一本つぷぷ……♡と挿入してしまった。

ナカはまだまだキツいものの、クリや割れ目をたっぷり苛め抜かれたせいか、指一本なら多少の痛みのみで終わる。それどころかナカのGスポットを指の腹で擦られた瞬間、とぷりと愛液が滴り落ちた。

「っひあ♡うあ、あゝ……なん、っでえ……？」

「そりゃ雌しこりを押したからな♡お前みたいなカントとか女の子が気持ちよ～くなれるところってわけ♡」

「んぎっ……ふーっ♡ふーっ♡うぎゅ、う、うぁゝ……ッ
♡♡♡」

くり、くり、かりっ♡こしゅ♡こしゅっ♡ちゅぷぷっ
♡♡♡

リズムカルにGスポットを叩かれ引っかかれ、ナカを指で押し広げるようにこねくりまわされる。

そのたびに静流の視界に火花が飛び散り、がくがく身体を震わせながら倒れ込みそうになっていた。

しかし、実際に倒れることはない。前も後ろも左右も、三百六十度痴漢の壁に囲まれている。おかげで助けてという声も届くことはないし、多少喘いだところで人の壁と電車の走行音にかき消されてしまうのだった。

「あ～、どんどんとろっとなってく」

「乳首うめえ♡まだ小さいけど育ててぷっくりピンク色に膨らんだエロ乳首にしてえ♡」

静流の反応に男たちは盛り上がり、どよめく。異様な気持ちの悪い熱気が場にこもっているが、誰もそれを指摘などしない。

逃げたくて震えながら身をよじっても、男たちの興奮材料にしかない。そもそもこれだって、結局のところ快感から少しでも逃れようとしているだけであって、脱出できるなんて静流だって思っていない。

でも、それを認めてしまったら、本当の本当に終わってしまう。ただでさえ快樂を感じているのだから……♡

「指が二本、あ～三本入っちゃった♡とろとろでここに挿れたらさいっこ～に気持ちいいんだろうなあ♡」

「あっあっあっ♡うあ、ひ、っう、んン♡♡」

「声がどんどん甘くなってるな、ちゅぱ、そろそろいいんじゃないか？」

「確かに、ずっと我慢してたんだよ。痛いって泣かれたら萎えるしさ」

指三本が膣壁を押し広げ、伸ばしながらざらざらの壁を執拗に擦ってくる。とろ、とろおりと愛液が指を伝い、電車の床にしたたり落ち、小さな水たまりができ始めたころ、食べごろだと男たちは判断した。

「とりあえず一回イかせてやるよ♡」

そう宣言した途端、ほぐしていた男の手の動きがいきなり激しくなった。

「あひ！？やめ、あっあっ♡んう、っあぐ、はげ、しっ……
！？♡」

ぐちゅ、ぐちゅちゅ、ぬち、ぬた、ぬた、ぬたっ♡
ずぷ、ずぷぷ、ぐりゅりゅんっ♡♡♡

「ほおら、イッチまえよ♡一度イッたら病みつきになるぞ？」

ずぼずぼ激しく指がまんこに出入りし、そのたびに引き締まった若い太ももがびく、びくんっ♡と痙攣するように震えた。

視界が涙で滲む。気持ちいい。こんな気持ちいいの知らない。

だんだんと、快感以外のことが頭から抜け落ちていく。それらすべて、男たちの常套手段なのだと静流は気づくことができない。

「うお♡すっげートロ顔♡なんだ、痴漢レイプだってのに感じちゃって、かーわいい、唇奪っちゃお♡」

「んぢゅっ！？♡じゅる、じゅぱっ……♡はぎゅ、ん、やだぁ、くさ、いいッ……♡ぬるぬる、するっ……♡」

「臭いとかおじさん傷つくよ？口臭ケアもしっかりしてるんだから、ちゅむむっ♡」

男の一人が、手マンされて感じている静流の頬を大きな手でがっちり掴み、キスを仕掛ける。

ぬるりとした、軟体生物のような舌が静流の唇を無理やり
割り開き、侵入を果たす。噛んでやりたいのに、おまんこや
乳首を刺激されると全身に力が入らなくなってしまう。

(ファーストキスが、こんなやつとなんて……！)

カントボーイである以上、好きな相手と恋愛できるとは思
っていないかったけれど。でも、これは違いうだろう。

くやしい。そう思っても、次の瞬間にはGスポットを強く爪
の先で抉られてそんな思いも踏みにじられ、霧散してしまっ
た。

「ほら、ここがポルチオだよ～♡カントボーイ君♡」

「あぎっ♡ひっ……そこ、ぐーで、おさないでっえゝ……♡
」

ぐちゅ、くぼっ♡ぐじゅ、ぐちぐちっ♡♡♡ぐっぐっ
♡♡♡

「子宮も気持ちよくなれるところだからな♡覚えて帰るんだぞ♡♡♡」

「うあ～～～ッ♡やだ、なんかきちゃ、きちゃ、ッアゝ
.....～～～おほ♡♡♡」

「そらいけ、思いっきり気持ちよ～く絶頂しちゃおう
ねえ！」

「っおほおおゝ ーー～～～～ッ♡♡♡」

下腹部を押されながら膣のいいところをたっぷり指で撚られた瞬間、静流はぷしゃっ♡♡♡と勢いよく潮を噴き、そのまま達してしまった。

男がそれを見て笑いながら指を引き抜く。下半身がじんじん痺れて、子宮がじくじく疼く。とろっとろのまんこはとぷっ♡とぷぷっ♡と潮だけでなく愛液も滴らせており、くばくば収縮を繰り返している。

男たちが一齐に手を引くと、支えを失った静流は立ってられず、その場にぼてりと蹲ってしまった。

「はーっ……♡は、へえ……♡♡♡」

気持ちよかった。自慰なんてものとは比べ物にならないくらい、頭が真っ白になって全身の制御が効かなくなった。

全身を快楽の余韻に浸し、荒い息をつきながら身体を震わせる静流を、男たちは見下ろしながらにたにた笑う。すっかり出来上がっている。

こうなればこっちのもので、痴漢レイプされる才能がある
とこの場の静流以外の誰もが確信していたし、その通りだった。

「さて、そろそろいただきますかね」

痴漢たちの一人がぼそりと呟く。

それを皮切りに、誰が静流の処女を奪うか議論が始まった。

「誰が最初にやる？」